

江田弘良氏の

「風景写真展」 閲覧記07

令和7 年10 月12 日

記：高岡一人

展示会場：坂野記念館(岡山市北区栢谷)

閲覧日時：令和7年10月9日 午後

今年も江田さんの風景写真展が行われています。

20点の中から幾つかを抜粋してご案内しますのでぜひ

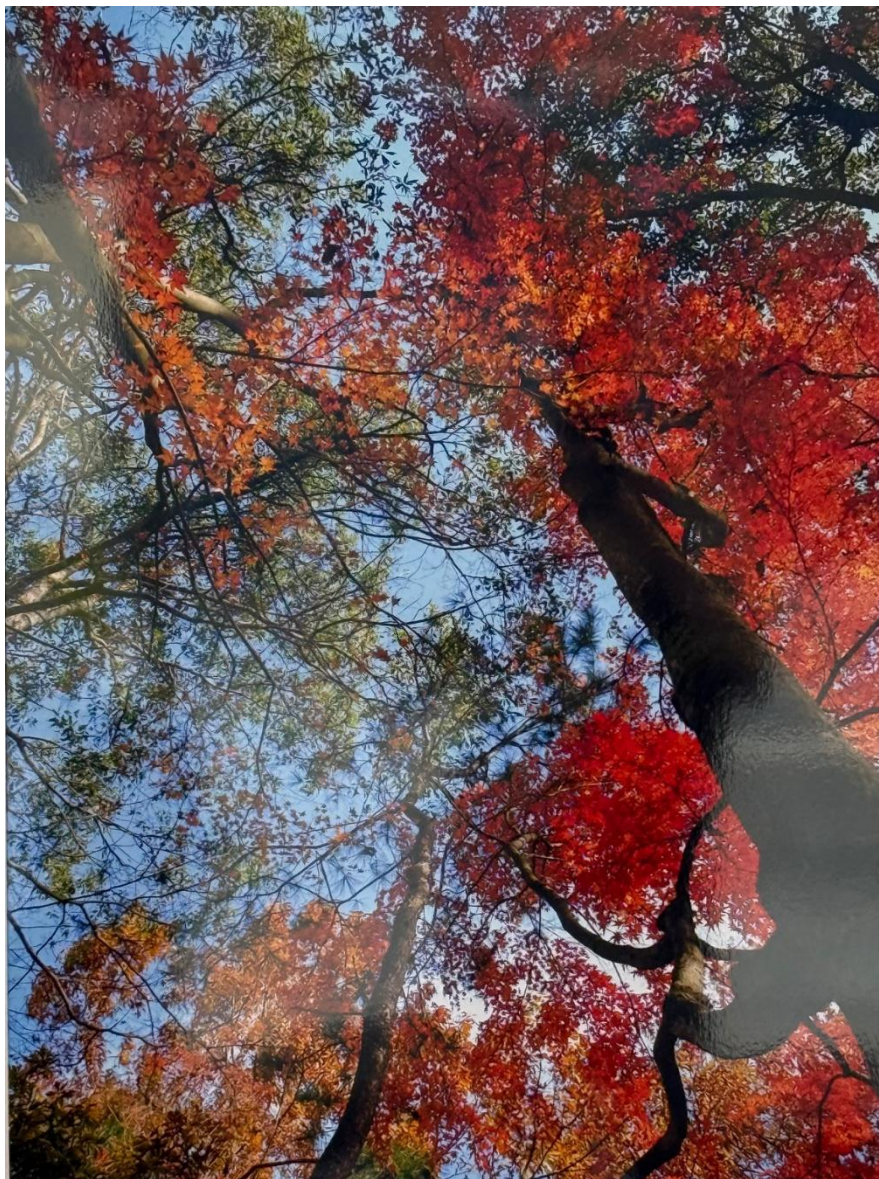
現物もご覧ください。（今年は10月29日が最終日）

今回も江田さん直々の解説をしていただきながら作品を見せていただきました。色彩豊かで感動的な素晴らしい作品の数々に心を奪われました。

これらの作品が誕生するまでの苦労話をお聞きするにつけ写真というものがいかに忍耐を要し、時間と感性を要求し更に言えば幾ばくかの財力を必要とするか等、早い話、我々凡人には仕上がった写真を見せてもらうのが最も楽しいという結論になりそうです。

何はともあれ作品紹介に参りましょう。

【1】 秋彩



会場エントランスに展示されていた作品。鮮やかな紅色が背景の青空に映えて美しい。黒い大樹が空に昇る竜の如しと評した人がいたとか・・・
残念なことにその黒がガラスの反射光で白っぽくなってしまった。御免！

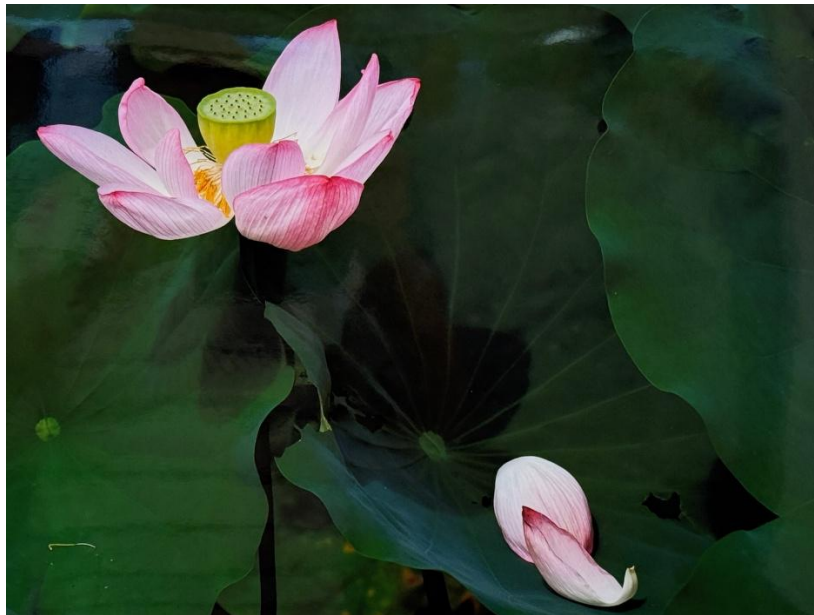
【2】 我が世の春



まるで作り物のような小鳥はウグイスか？梅にウグイスとは古典的ながら日本の春を表すには欠かせない素材。この絵をみて春の香りを連想しない人はいないだろう。ウグイスにとって「我が世の春」とは意を得たり。

訂正:この小鳥はメジロのようです

【3】 沈着



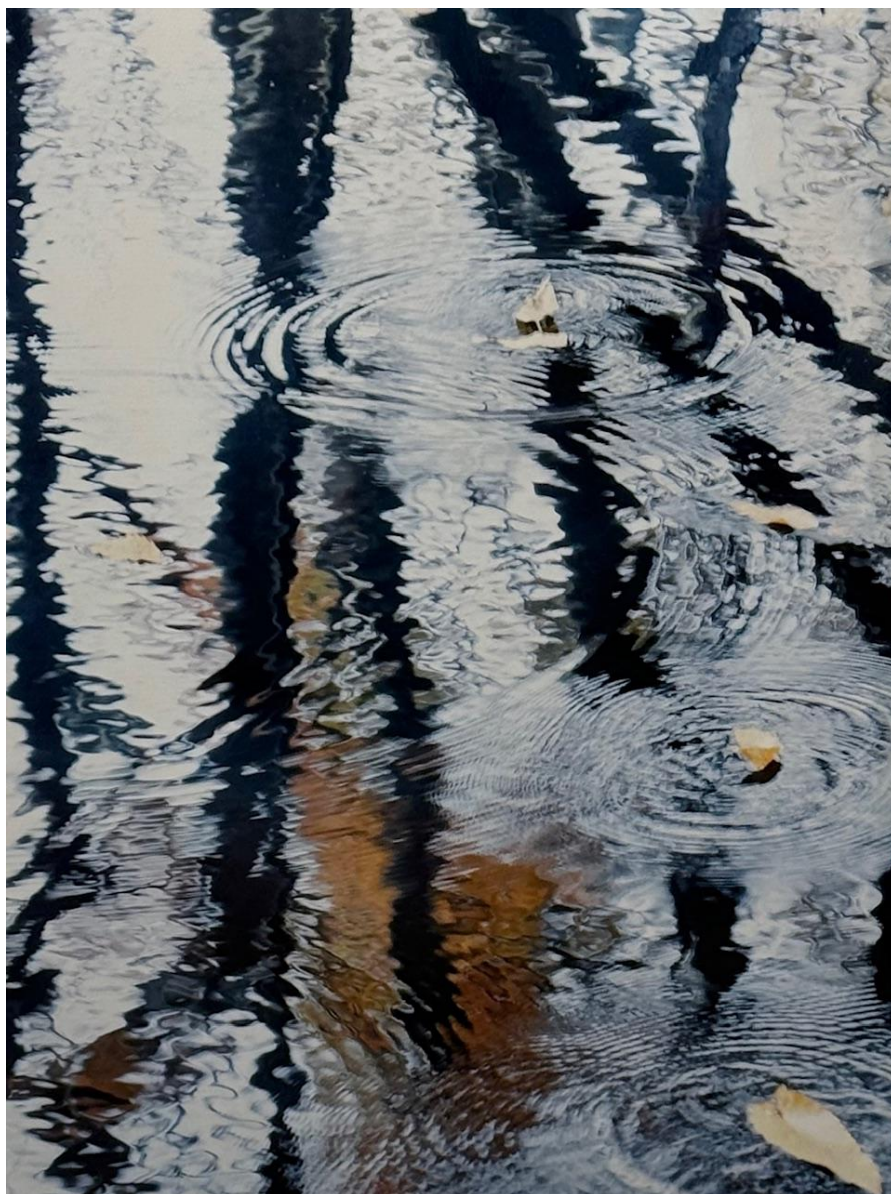
写真の撮影に気を取られて「沈着」の意図を聞き逃したが、想像するに暗黒の背景にぽっかりと浮き上がる鮮やかな花がいかにも画面に染み付いた絵具を思わせたのか。この鮮やかな花と背景のコントラストはとても印象的だ。

【4】 錦秋



錦秋とはよく言ったもので、まさに錦絵の如く、ありとあらゆる色相が相交わりあってこの世のものとも思えぬ美しさを醸し出しこの季節を表現する。いつの世までも残ってほしい風景の一つだ。

【5】 ゆく秋



色合いの妙というか単純な白と黒の世界に広がるわずかな「色」が異なる世界を作り出していて、枯葉一つ一つが波紋によって別世界と繋がるような不思議な光景が見えてくる。これこそが感性の生み出す世界。私の中での逸品。

【6】 秋 燃ゆる



実際には白くたなびく霧のような現象を煙に見立てて「秋が燃えている」と表現した撮影者の気持ちがとてもよく伝わってくる画像だ。

【7】 冬落暉



落暉(らっき)とは一般的には「沈む太陽の光」を意味する言葉で別の言葉で表すと「落日」といい、英語では「setting sun」と表現されるようです。したがって冬落暉は「冬の落日」ですが「冬落暉」の方がなんとなく優雅に響きます。俳句では冬落暉」が冬の季語として使われるそうですね。写真家はこんな言葉にまで精通しているのですね。感服！

【8】 黄昏セレナーデ



ご存じの方も多いかもしれませんね。秩父ガ浜の風景です。この場所でこの夕日、この色をとらえるタイミングは偶然とは思えない奇跡のような気がしています。実はこの場所の写真が別に2枚展示されていました。今回取り上げませんでしたがこの絵からは考えられないほど違った風景が捉えられていました。ちなみに画像に写っている女性は縁もゆかりもない方だそうです。

【9】 白露



ススキの穂先に光る夜露を捉えた1枚。画面下の玉ボケが意外なほどいい雰囲気を生み出している。これがないと画面全体のインパクトが半減して見えるから不思議。

【後記】

今回で7回目の閲覧記になりました。「えっ！そんなになりましたか」と我ながら驚いています。最近では閲覧後、親睦会と称して「飲み会」などを行うようになり同級生の輪が広がってきて「飲み」が本命なのか「写真閲覧」が本命なのかよくわかりませんが楽しく話し合える場ができてきたことはうれしいことに違いありません。話題の果ては「いつまで出来るか？」が主題にならないように、全員元気に明日を楽しみましょう。